「17年目の秘密」

第7話「これからの生活」

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

谷島春樹（17）　中央高校全日制二年生
竹中倫子（17）　アルバイト
山岸利枝子（17）　中央高校全日制二年生
友子（45）　母、スナックのママ
あやめ（15）　妹、中学三年生
宮田真由子（17）　未婚の母
真実（0）　娘、赤ん坊
藤原亮（17）　中央高校全日制二年生
深雪（15）　妹、中学三年生
川村浩輔（17）　中央高校定時制二年生
靖司（52）　父、会社員
愛子（49）　母、専業主婦
謙輔（25）　兄、会社員
牧和哉（17）　滝雀学園高校二年生
貴幸（48）　父、不動産会社社長
淑子（45）　母、不動産会社副社長
永井聡実（17）　滝雀学園高校二年生
松野明（31）　中央高校全日制教師
同級生亜沙美（17）　中央高校全日制二年生
〃　剛士（17）　中央高校全日制二年生
〃　奈々（17）　中央高校全日制二年生

1　アパート・全景（朝）

2　同・谷島家・居間

給仕をしている倫子――制服姿の春樹が朝食を食べている。

倫子「今日は遅いの？」

春樹「どうして？」

倫子「昨日、少し遅かったような気がしたから」

春樹「あ、ああ……。昨日はちょっと、急にやることが増えて少し遅くなっただけだよ。多分、今日はいつも通りに帰ってくると思う」

倫子「そっか」

複雑な顔をしている春樹。

3　中央高校・二年Ａ組教室

生徒たちが噂話をしている。

男子生徒Ａ「春樹、停学処分になったらしいな」

剛士「それ、確かなのか？」
奈々「けど、どうして？」
女子生徒Ａ「亜沙美を襲ったらしいよ」
剛士と奈々「えッ……!?」
女子生徒Ａ「何があったのか分からないけど、
やっぱり春樹も男なんだよね。変な気持ち
になって、問題起こしちゃうんだよ」
剛士「……」
奈々「……」
と、利枝子と亮が登校してくる。
利枝子と亮「おはよう」
剛士と奈々が、利枝子たちのところへ
やってくると、
剛士「おい、聞いたか。春樹、停学処分にな
ったんだって」
亮「春樹が？　何かの間違いだろ」
奈々「それがね、春樹、すごい問題起こしち
やったの」
利枝子「何やったの？」
剛士「亜沙美を襲ったらしい」

亮「はぁ？」

利枝子「（怪訝そうに）……」

奈々「まだ詳しいことは分からないの。ただ、学校は朝からこの話で話題になってる。なんせ、あの春樹が亜沙美を襲って、停学処分になったんだから」

亮「でも、一体何があったんだ」

利枝子「……」

4　同場所（回想）

松野が難しい顔をして入ってくる。

春樹「あ、先生」

松野「春樹、今すぐ生徒指導室に来い」

春樹「（一瞬利枝子を見てから）もう少ししたら行きます」

松野「（怒鳴って）今すぐにだッ」

驚いて黙ってしまう春樹と利枝子。

春樹「（利枝子）ごめん、この続きはまた。先に帰ってて良いからね」

と、松野と共に出ていく。

5　同場所（回想戻り）

難しい顔をしている利枝子。

と、亜沙美が登校してくる。

亜沙美「おはよう」

奈々「亜沙美、大丈夫だった？」

亜沙美「うん。心配かけて、ごめんね」

剛士「春樹の奴、次学校に来た時はただじゃ済ませないからな」

亜沙美「あまり春樹のこと責めないであげて。春樹だって男なんだもん。仕方ないよ」

利枝子「……」

亮「（亜沙美に）仕方ないで済むことじゃないだろ」

亜沙美「良いの。それに、処分になって、反省してくれたら、それで良いから」

亮「亜沙美……」

亜沙美「私は大丈夫だから」

と、亮たちに微笑む。

一人警戒するように、亜沙美を見てい

る利枝子。

6　中央高校・二年Ａ組教室

生徒たちが昼食を摂っている。

利枝子、携帯電話を取り出すと、廊下に出ていく。

7　同・廊下

利枝子、出てくると、携帯電話をかける。

8　アパート・谷島家・居間

倫子が、鼻歌を歌いながら、掃除機をかけている――携帯電話が鳴り、出る。

倫子「もしもし。利枝子、どうしたの？　こんな時間に」

9　中央高校・廊下

利枝子が携帯電話で話している。

利枝子「ねえ、春樹から何か聞いた？」

倫子の声「何って、何も聞いてないけど」
利枝子「春樹、倫子には何にも言ってないんだ。ねえ、ちょっと春樹に代わって」
倫子の声「何言ってるの。春樹、今学校にいるはずでしょ」
利枝子「春樹、いないの？」
倫子の声「え、どういうこと？」
利枝子「実はね……」

10　アパート・谷島家・居間

倫子が、携帯電話で話している。

利枝子の声「春樹、停学処分になったの。同級生の女の子を襲ったみたいで」
倫子「そんな……。春樹からそんなこと聞いてないし、現に、今朝だって普通に制服着て家出ていったんだよ。まさか、停学処分になったなんて思わないし……。同級生の女の子って、誰を襲ったの？」
利枝子の声「クラスメイトの亜沙美っていう子なの」

倫子「亜沙美ッ……？」
利枝子の声「知ってるの？」
倫子「うん。前に家に来たことがあるの。春樹のことが好きだって言ってね。私が一緒に住んでるの知ってるから、独り占めなんてさせないって私に文句言いにきたの」
利枝子の声「そうだったのッ……？」
倫子「うん」

11　中央高校・廊下

携帯電話で話している利枝子。
倫子の声「けど、春樹に限ってそんなこと……。何かの間違いだよ、絶対……。私は、春樹を信じるから……」
利枝子「倫子に心配させたくなかったんだろうね、きっと。春樹が帰ってきても、何も言わないであげてよ。春樹だって辛いんだから。それじゃあね、また」
と、電話を切る。
利枝子「（呟くように）自作自演だったって

ことか……」

12　公園

春樹が、ぼんやりとベンチに座っている。

と、ベビーカーに真実を乗せた真由子が散歩にやってくる。

真由子「春樹ッ」

春樹、真由子に気づくと、

春樹「真由子ッ。（と微笑むと）相変わらず、元気そうで」

真由子、春樹の隣に座ると、

真由子「真実がいてくれるから、自然と元気にもなれるの。あれ、今日学校じゃないの？」

春樹「うん……今日はね、サボっちゃった」

真由子「珍しいこともあるんだね。春樹が学校サボるなんて」

春樹「まあ、俺もいろいろあるんだよ。最近思うんだよね、人間関係って難しいんだな

って」

真由子「……？」

春樹「別に、学校が嫌ってわけじゃないの。クラスだって部活だって充実してるから、日常生活ではそうは思わないんだけど、友達といるとね、やっぱりいろいろあるから。些細なことで不仲になって、一回の嘘が絶交状態にもなりかねないし……」

真由子「それって、利枝子のこと？」

春樹「まあね。利枝子は、俺と絶交はしたくないようなことは言ってた。俺だって、正直友達を失うようなことはしたくない。でも、一度不仲になると、なかなかそれって修復できないし、仮に仲直りしても、また何かあったら、それを掘り返すようなことにもなりかねないでしょ。これからのこと、利枝子とまた話し合わなきゃなって思ってる……。まあ、それ以外にも、いろいろ問題はあるんだけど……」

真由子「そうなんだ……。私、春樹は真面目

だから、学校生活も普通に楽しんでると思った。けど、やっぱりみんなそれぞれに、何かしらの問題抱えてるんだ」

春樹「真由子は、そうでもないでしょ。真実ちゃんを育てることだけを生きがいにしてるから」

真由子「まあね。前に、別れた彼氏が何度も電話して来たり、家に来たこともあったけど、それもここ最近は何も変化がないから、正直ホッとしてる」

春樹「利枝子から、事情は聴いてるよ」

真由子「今更話すことなんてないって、すぐに追っ払ってやったよ」

春樹「それが良いそれが良い。裏切った男の弁解なんて、今更聞く必要なんてないんだから」

真由子「だよね。おかげで、今は平和に真実を育てることに集中できてる。（と真実に）ねえ、真実」

笑っている真実。

春樹も、いつの間にか微笑んでいる。

タイトル

『第７話　これからの生活』

13　アパート・谷島家・居間

洗濯物を畳んでいる倫子――ふと手を止め、難しい顔になる。

14　中央高校・二年Ａ組教室

帰りの学活が行われており、松野が生徒たちに話をしている。

松野「春樹のことでは、みんなに心配をかけたと思う。春樹が処分の間に反省して、また学校に来てくれたら、先生としては嬉しい。ただ、学校祭に出れないというのが、本当に残念だ。それでもみんなには、春樹にやさしく接してあげてほしい。これが、担任としての俺の気持ちだ」

と、チャイムが鳴る。

松野「話はこの辺りにしとこう。（と亮に）
亮、春樹の代わりに、号令頼む」
亮「はい。起立」
と、立ち上がる生徒たち。
亮「さようなら」
生徒たち「さようなら」
と、出ていく松野。
利枝子、亮に慌てて、
利枝子「ねえ、亜沙美と剛士と奈々を連れて、
生徒指導室に今すぐ行って」
亮「俺も？」
利枝子「良いね、頼んだよ」
と、飛び出していく。
唖然としている亮。

15　同・廊下

松野が歩いている。
利枝子が走って、あとを追いかけてく
る。
利枝子「先生ッ」

松野、気づいて振り返る。

松野「どうした、利枝子？」

利枝子「どうしても、お話したいことがあるんです。すぐに生徒指導室に来てください」

松野「ああ、良いけど……」

16　同・生徒指導室

利枝子、亮、亜沙美、剛士、奈々、松野、菊本が話している。

利枝子「（亜沙美に）亜沙美、春樹に襲われたこと、辛いかもしれないけど、もう一度話してくれない」

亜沙美「……」

菊本「急にどうしたんだ？」

利枝子「（答えず亜沙美に）話して。私、亜沙美の力になりたくて、何があったのか知りたいの、お願い」

亜沙美「……昨日ね、春樹に呼び出されたの。話があるって言われて。そしたら、突然襲ってきて……」

利枝子「それ、いつ頃のこと？」
亜沙美「部活終了のチャイムが鳴ったときだったから、五時半頃だったと思う」
利枝子「（突然強い言い方になり）それは、ありえない話だね」
一同、怪訝に利枝子を見る。
亜沙美「……」
利枝子「新聞部の部員に聞いてみたら良いよ。春樹は、部活終了の五時半のチャイムが鳴った時、新聞部の部室で他の部員たちと後片付けしてたんだから」
亜沙美「……」
一同、次第に目線が亜沙美に向く。
利枝子「（立ち上がって）私、ちょうどその五時半のチャイムが鳴った時、春樹に話があって、新聞部の部室に行ったの。それも、部員たちに確認してみたら良いよ」
亜沙美「……」
利枝子「（松野に）先生。先生が昨日、春樹を呼び出したとき、春樹と一緒に私がいた

の、覚えてますか？」
松野「ああ、覚えてるよ」
利枝子「だったら、先生もよく考えてみてください。五時半まで部活をしていた春樹は、そのあと私と一緒にいた。いつ、春樹が亜沙美を襲う時間があったんですか？」
　黙ってしまう松野。
亮「（亜沙美に）なあ、本当に春樹に襲われたのか」
亜沙美「……」
奈々「亜沙美……？」
剛士「……？」
利枝子「（亜沙美に怒鳴り）正直に言ってごらんよ、自作自演だったって」
松野「自作自演……」
亜沙美「……」
利枝子「亜沙美、春樹のことが好きだったんだってね。どうせ、告白して、失敗したからその腹いせに、襲われただなんて自作自演して、春樹を陥れたんでしょ」

亜沙美「……」

利枝子「春樹は、心優しい性格だから、亜沙美の自作自演がバレないように、自分ひとりを悪者にして、やってもいないことをやったって言ったんじゃないのかな」

亜沙美、勢いよく飛び出していく。

利枝子「亜沙美ッ……」

松野「利枝子ッ。もう分かった。ここまで言えば、十分だろ。それ以上責めたら、亜沙美がどうにかなっちまうぞ」

利枝子「じゃあ、先生はこのままで良いとでも言いたいんですか？」

松野「そうじゃない。亜沙美のことは、また菊本先生とも話し合って考える。（と菊本に）菊本先生、それでよろしいでしょうか？」

菊本「はい」

亮「春樹の処分は、どうなるんですか？」

剛士「そうですよ。春樹は無実だったんですよね」

奈々「どうなるんですか？」
菊本「（冷静に）無実の生徒を、四週間の停学処分になんて、させられないだろう」
利枝子「ありがとうございます」
亮「よっしゃー、良かった良かった」
奈々「これで、春樹は無事に学校祭に出れるんだね」
剛士「けど、亜沙美はどうなるんだ」
利枝子「あんな奴の心配なんかしなくて良いの」
奈々「そうだよ。春樹を陥れるなんて、許せない」
亮「けど、やっぱり春樹は無実だったんだな。何かおかしいとは思ったけど」
利枝子「何言ってるの。停学処分になったって話聞いたとき、思いっきり食いついてたじゃん」
亮「そうだったっけ？」
と、笑いあう利枝子たち。
亮「先生、春樹には俺から伝えます。それで

良いですか？」
松野「……？」
亮「俺から言いたいんです。停学処分は無くなったって」
松野「（菊本に）どうしましょう？」
菊本「良いでしょう……」
ハイタッチをしあう利枝子たち。
松野と菊本は、難しい顔をしている。

17　アパート・谷島家・居間
私服のボタンを付け直している倫子。
と、春樹が帰宅する。
春樹「ただいま」
倫子「おかえり。今日は、何かあった？」
春樹「いや、いつも通りだよ」
倫子「……学校、今日行ってないでしょ」
春樹「真由子から聞いたの？」
倫子「真由子？」
春樹「公園で、今日サボったって話したからさ」

倫子「正直に言えば良いでしょ。停学処分になったって。例の、亜沙美っていう子を襲ったから」
春樹「利枝子から聞いたんだ……」
倫子「本当は、襲ってなんかいなんでしょ」
春樹「……」
倫子「私は知ってる。春樹は、絶対にそんなことはしないって。あの子のこと、庇ってるんでしょ」
春樹「……全部分かってたんだ」
倫子「当たり前でしょ」
春樹「亜沙美が、俺に襲われたって話をしたとき、告白を断った腹いせに、すぐに自作自演をしたってことが分かった。けど、ここで俺が否定したら、自作自演がバレるでしょ。だから、咄嗟に俺がやったって……」
倫子「告白、断ったの？　だから、こんな問題になっちゃったの？」
春樹「大方そうでしょ。亜沙美からしたら、プライドを傷つけられたって気持ちがあ

ったんだと思う。そうじゃなかったら、俺に襲われたなんて嘘、言うはずがないでしょ」

倫子「やっぱり、私のせいだ……。私のことを考えて、告白断ったんでしょ？」

春樹「……確かに、倫子のことも言われた。けど、倫子とはそういう関係じゃないってはっきり言ったし、俺だって、今は勉強と部活に忙しいから、誰かと付き合ってる暇なんてないんだよ。だから断ったの、それだけの話なんだから」

倫子「本当に？」

春樹「うん」

倫子「そう……」

春樹「停学処分も悪くないよ。夏休みほとんど学校に行ってたから、神様から頂いた休みだと思えば良いんだから。明日は、ゆっくり眠るよ。起こさなくて良いからね」

返す言葉のない倫子。

18　同・全景（翌朝）

19　同・居間

熟睡している春樹。

倫子が、携帯電話を持ったまま、慌てて春樹を起こす。

倫子「春樹、起きて。早くッ」

春樹、目を覚まして、

春樹「倫子、言ったでしょ。停学処分の間は、学校に行かないから、起こさなくて良いって」

倫子「停学処分は、無しになったよ」

春樹「えッ……!?」

倫子、携帯電話を春樹に渡し、

倫子「亮君から」

春樹、携帯電話を受け取り、

春樹「もしもし」

亮の声「いつまでも眠ってんじゃねえよ。早くしないと遅刻するぞ」

春樹「どういうこと？」

亮の声「春樹の無実が証明されたんだよ。早く着替えて、学校に来い」

と、電話が切れる。

倫子「春樹」

春樹「倫子、ごめんけど、すぐに弁当作ってもらって良い？　おにぎりぐらいで良いから」

倫子「分かったッ」

着替えを始める春樹。

20　中央高校・二年A組教室

春樹が登校してくる。

春樹「おはようッ」

生徒たち、春樹の姿を見て、一瞬驚き、ざわめく。

剛士「（生徒たちに）春樹の停学処分は、無しになったんだよ」

男子生徒B「どうして？」

剛士「それは……」

男子生徒B「どううまく言いくるめたか知ら

ないけど、本当はやったんじゃないのか」
亮、椅子を蹴飛ばすと、男子生徒Ｂのところへ行き、襟をつかむ。
亮「おい、今何て言ったッ。もういっぺん言ってみろよッ」
と、奈々が間に入って、慌てて止める。
奈々「亮君、落ち着いて」
亮「こんなこと言われて、落ち着いてられるかよッ」
春樹「亮君、もう良いの。済んだことなんだから」
亮「春樹は、こんなこと言われて悔しくないのか。俺は、何度殴っても殴り足りないぐらいなんだぞ」
春樹「一度は認めたんだもん、そう思われてもしょうがないし、俺は何を言われても平気だから」
女子生徒Ｂ「じゃあ、亜沙美を襲ったのは誰なのかな？」
と、利枝子が亜沙美の腕をつかみなが

ら入ってくる。

利枝子「全部、この女の自作自演だったんだよ」

生徒たちが、更にざわめく――春樹たちは冷静な顔をしている。

利枝子「（亜沙美をにらみつけながら）自分が春樹を陥れたのに、今日なんか平気な顔して学校に来るんだもんね。この女の性格、どうなってるんだろう」

春樹「（冷静に）利枝子、何もみんなの前でそんなこと言わなくても良いでしょ。今回のことは、俺にも落ち度があったんだから。亜沙美一人のせいにしたら可哀想だよ」

利枝子「自作自演して春樹を陥れた女の何が可哀想なのッ。春樹のほうがよっぽど可哀想じゃん……」

春樹「利枝子……」

利枝子「私、何があっても亜沙美のことだけは許さないからね」

亜沙美「……」

春樹「俺が良いって言ってるんだから、それで良いでしょ。もう学校祭だって近いんだから、またみんなで協力して、学校祭成功すれば、それで良いと思ってる。そうすれば、また元のように団結力のあるクラスになると思う。俺だって、こんな形で亜沙美との仲が不仲になるのも嫌だしね……。今度のことは、お互い様ということで良いでしょ」

黙ってしまう生徒たち。

21　宮田家・居間

真由子が、真実のおむつを替えている。

倫子が来ており、ソファーで座っている。

倫子「手伝おうか？」

真由子「大丈夫。真実はね、私がおむつ変えないと、機嫌が悪いの。うちの父さんがやっても泣いちゃうぐらいだから」

倫子「それぐらい、真実ちゃんはお母さんが

大好きってことだよね」

真由子「母親冥利に尽きるけどね（と笑う）」

倫子「ねえ、真由子にこんなこと聞くのはなんだけどさ、やっぱり女子から見て、片想いした男の子の側に、幼馴染の女がずっと一緒にいると、良い気しないよね？」

真由子、後始末をしながら、

真由子「急にどうしたの？　春樹と何かあったの？」

倫子「いや、そういうわけじゃないの。ただ、最近思うんだ。このままだと、私、春樹のお荷物になっちゃう気がして……」

真由子「倫子……」

倫子「私のせいで、春樹は恋愛できないんだと思う。私の考えすぎかもしれないけどさ……。私、あの家出ようと思ってるの」

真由子「本気でそんなこと言ってるの？　出て行ってどうするの？　居所でもあるの？」

倫子「それは、これから探すの。私が一緒に

いると、春樹は不幸になる。春樹のためにも、私は一緒にいちゃいけないの。だから、出ていくのが良いのかなって」

真由子「春樹は、何て言ってるの？」

倫子「まだ春樹には言ってない。どうせ春樹のことだもん、止めるに決まってる」

真由子「それが春樹の優しさなんだよ。昔からの仲で、倫子のことを放ってはおけなかったからでしょ。春樹に甘えてれば良いじゃない、そういう幸せもありでしょ」

倫子「いつかは別れるときが来るの。結婚するわけじゃないし、いつまでも一緒に暮らすわけにもいかない。それだったら、早いうちに私が出ていったほうが、お互いのためにも良いと思うから」

真由子「……」

倫子「私だって、正直ずっと一緒にいたい。というか、側にいるのが当たり前だと思ってのがいけなかったんだよ。だから、こんな変なことを思うようになっちゃったん

だよ。離婚したとき、春樹の言葉にさえ甘えていなかったら、こんなことにはならなかったのかもしれない……」

真由子「春樹が学校サボったことと、何か関係があるの？」

倫子「え？」

真由子「前に、公園で会って、学校サボったって言ってたから」

倫子「まあね……。春樹だって、私の知らないところで大変な思いしてるの。そこに、私が加わったら、春樹は参っちゃうでしょ」

真由子「……」

倫子「私が、春樹の人生を不幸にさせてるのかもしれない……。不幸になるのは、私一人でたくさんなの……」

難しい顔で黙ってしまう真由子。

22　中央高校・玄関

亜沙美が一人で帰っていく。

そのあとに来る利枝子と奈々。

奈々「明日も来るのかな、亜沙美」

利枝子「当たり前でしょ。春樹が簡単に許すから、亜沙美だって当たり前のような顔をして学校に来るんだから。このままじゃ済ませないんだから」

と、怖い顔をする利枝子である。

23　同・廊下～生徒指導室

春樹、来る――ノックをして、部屋に入る。

春樹「失礼します」

松野と菊本が見迎える。

春樹「すいません、遅くなっちゃって」

松野「春樹、すまなかった」

と、菊本と共に頭を下げる。

春樹「先生……。頭あげてください」

菊本「潔く認めたのを良いことに、停学処分四週間にしてしまい、本当に申し訳なかった。何の罪もない生徒を、停学にさせるとは……」

春樹「僕がいけないんです。やってもいないことをやっただなんて言ったから……」

松野「いや、あの時、もう少し春樹に聞いておけば良かったんだ。そしたら、亜沙美だって本当のことを言えたかもしれないんだ。あまりに事が早く進んでしまって、亜沙美も驚いたことだと思う」

春樹「その亜沙美のことなんですけど、僕みたいに処分はしないでほしいんです。確かに、嘘を言って、自作自演をしたことはいけないことです。でも、これを機に深く反省してくれれば良いと思っています。謹慎とか停学とか、そういう形にこだわるより、大事なのは本人の意思です。大きな処分にすれば反省する気持ちだって、大きくなると思いますが、それで万事丸く収まるかと言うと、それは違うと思います。今回は、この僕に免じて、亜沙美のことも、学校に迷惑をかけてしまった僕のことも、ぜひ許していただけたらと思います」

と、頭を深々と下げる。

松野「春樹……」

春樹「先生、ご心配をおかけしました。では、これで」

と、出ていこうとする。

松野「春樹」

春樹「はい」

松野「利枝子に、感謝するんだぞ」

春樹「利枝子にですか？」

松野「利枝子が、俺たちに春樹の無実を証明したんだ。五時半のチャイムが鳴った時、春樹は新聞部の部室にいて、そのあと自分と話をしたから、亜沙美を襲うことは不可能だって」

春樹「利枝子が……」

×　×　×

〈フラッシュ〉

今朝の二年Ａ組の教室。

利枝子「全部、この女の自作自演だったんだよ」

×　　×　　×

利枝子「（亜沙美をにらみつけながら）自分が春樹を陥れたのに、今日なんか平気な顔して学校に来るんだもんね。この女の性格、どうなってるんだろう」

×　　×　　×

春樹「……」

24　同・昇降口

亜沙美が下校しようとしている。

と、利枝子と奈々がやってきて、

利枝子「亜沙美」

奈々「ちょっと良い」

いぶかしい顔の亜沙美。

25　同・テニス部室

利枝子が、亜沙美に突っかかっている。

かごが落ちて、テニスボールが散乱する。

亜沙美「何……？」

奈々「あんた、自分が何したか、分かってるの」
亜沙美「それは……」
利枝子「あんたのせいで、春樹のイメージがどれだけ悪くなったか、分かってるの？春樹だけじゃない、春樹の名前が変な意味で広まったせいで、新聞部の名前にも傷がついたんだよ。このまま、何の処罰もないまま許されると思った大間違いだよ」
亜沙美「（痛がって）……」
奈々「大事な友達を陥れるようなことをするような女なんて、友達なんて思いたくない」
亜沙美「……」
利枝子「春樹がどんな気持ちで、あんたのことを庇ったか……。その気持ち、分かる？」
亜沙美「……」
奈々「何とか言ってごらんよ」
亜沙美「……」
利枝子「私にとって春樹は、大切な友達なの。そんな大切な人に酷いことをした亜沙美

は、絶対に許さないからね……」

亜沙美「……」

利枝子の目に涙が浮かんでいる。

26　同・テニス部室前の廊下～テニス部室

春樹たちが歩いている。

春樹、亮、剛士が周囲を見ながら歩いている。

亮「あいつら、どこ行ったんだろ」

剛士「靴があったってことは、まだ学校内にはいるんだよな」

と、テニス部室から大きな物音がする。

お互いの顔を見合う春樹たち――小走りになり、慌ててテニス部室のドアを開ける。

利枝子が、亜沙美の頬を叩く。

春樹「利枝子、何やってるんだよ……。（と亜沙美に）亜沙美ッ、大丈夫……？」

亜沙美「……」

春樹「（利枝子をにらんで）亜沙美だけが悪

いわけじゃないって、俺、今朝言ったよね？　（と奈々に）奈々も、黙って見てたの？」

利枝子「だって……許せなかったんだもん。亜沙美のことが」

春樹「……」

亮「……」

剛士「……」

利枝子「春樹は、あっさり亜沙美を許したかもしれないけど、私はそんな気持ちにはなれなかった。春樹を陥れたこの女が許せなかったのッ」

春樹「だからって、何もここまで……」

利枝子「こんな女、もう知らないッ」

と、飛び出していく。

春樹「利枝子ッ」

亮「（春樹に）俺が行く」

春樹「ありがとう」

と、利枝子の後を追っていく亮。

亜沙美、その場に崩れるようにしゃが

みこむ。

春樹「亜沙美、大丈夫……？」

と、手を差し伸べる。だが、手を取らない亜沙美。

春樹「亜沙美……？」

亜沙美、春樹を突き飛ばして、

亜沙美「ほっといてよッ、私のことなんて」

春樹「亜沙美……」

剛士「……」

奈々「……」

亜沙美「どうせ、ざまあみろって思ってるんでしょ。口では許してるようなこと言っても、自分の代わりに誰かが私の事をこらしめるのを期待してたんでしょ」

春樹「俺、そんなこと……」

亜沙美「もう、私に関わらないで。そのほうが、春樹のためでしょ」

と、泣きながら飛び出していく。

春樹「亜沙美ッ……」

と、呆然と立ち尽くす。

奈々「ごめん、春樹……。私も、利枝子と同じようなことして……」
春樹「どうして、利枝子を止めなかったの」
奈々「利枝子の気持ちも、よく分かったから。春樹を陥れた亜沙美のこと、私も何だか許せなくて……」
春樹「……」
剛士「……」
奈々「私だって剛士に告白したから、亜沙美がどんな気持ちで春樹に告白したのか、何となくだけど分かる気がする。でもいくらフラれたからって、ここまでする必要なんてないって考えると、利枝子と同じような考えで、亜沙美のことが許せないって思っちゃったんだよね……」
春樹「みんなして、こんなことになるなんて……。今日は帰って、気持ちの整理したら？　俺も、亜沙美を傷つけない断り方があったんじゃないかって、考えてみるから……」

奈々「……」

春樹「（剛士に）剛士、奈々連れてって」

剛士「ああ……。（と奈々に）行くぞ」

と、奈々を連れて出ていく。

一人残された春樹、散乱したテニスボールをしばらく見つめると、拾い始める――その顔は、とても寂しそうな顔をしている。

27　スナック〝友子〟・表

春樹がやってくる。

28　同・店内

友子が食器の支度をし、あやめがテーブルなどを拭いている。

と、ドアが開き、春樹が入ってくる。

あやめ「（春樹を見て）春樹先輩」

春樹、友子に一礼をすると、

春樹「すいません。お店の準備の時間に突然お邪魔して……。利枝子、いますか？」

友子「いるわよ。（と奥に向かって）利枝子、お友達よ」

と、階段を下りてくる音が聞こえ、利枝子が出てくる。

利枝子「誰？　（と春樹を見て）春樹……」

春樹「ちょっと、話したいことがあって……」

利枝子「じゃ、私の部屋で」

春樹「うん。（と友子に）では、失礼します」

と、利枝子と共に母屋へと向かう。

いぶかしそうな友子の顔。

友子「（あやめに）ねえ、あの子、利枝子とどんな関係なの？」

あやめ「どんなって、お姉ちゃんとは中学校からの同級生だよ。今でもクラスが一緒だし、私の相談にも乗ってくれた優しい先輩だよ」

友子「ふーん」

29　山岸家・利枝子の部屋

春樹と利枝子が話している。

利枝子「何、話って」
春樹「さっき話せなかったけど、先生から聞いた。俺の無実証明してくれたの、利枝子なんだってね」
利枝子「……」
春樹「けど、あれはやりすぎだと思う。あれじゃあ、一方的に亜沙美が悪いことになるでしょ。亜沙美だって可哀想だよ……」
利枝子「じゃあ、あのままで良かったの？簡単に許したけど、それで亜沙美が反省すると思ったの？」
春樹「もう済んだことじゃん。だから、俺だって後に引きずるのも良くないと思ったから、お互い様ってことにして許したんだよ」
利枝子「……」
春樹「この間、部活が終わった後、利枝子と話したこと、覚えてる？　このままじゃ嫌だってこと」
利枝子「……」

春樹「俺も、利枝子と和解したいに決まってる。そんなときに亜沙美とのことがあったでしょ。それでさっきは、あんなことがあって……。あれはやり過ぎだとは思うけど、あそこまで亜沙美に食って掛かる利枝子を見てたら、そこまでして利枝子は、俺のことを考えてくれて、俺を陥れた亜沙美のことが許せないんだって言うのが分かった気がする……。俺は、利枝子と絶交することなんて、できないんだって……」

利枝子「春樹……」

春樹「利枝子は、周りに流されず、俺の無実を証明してくれた恩人だよ。そりゃあ、あんな無茶をするような利枝子だけど、そんな大切な人と絶交なんて、できるわけないでしょ」

利枝子「……」

春樹「ごめんね、利枝子。俺の勝手な我儘だけど、これからも友達でいてくれる？　だから、友達として言わせて。亜沙美のこと、

許してあげて。亜沙美のことを許したくないっていう利枝子の気持ちを分かったうえで、頼んでるの……」

しばらく沈黙が続く。

利枝子「（微笑んで）私と春樹の仲だよ」

春樹「……」

利枝子「どこまで、お人好しなんだろうね、春樹は……」

春樹「……」

利枝子「絶交しようとか言って、喧嘩もしたけど、結局私たちは友達の縁を切れる勇気なんてないんだよね。喧嘩するほど仲が良いって、こういうことかもしれないね」

春樹「利枝子……」

春樹に手を差し出す利枝子。

春樹「……？」

利枝子「握手。仲直りの握手しよッ」

と、春樹も手を差し出し、利枝子と握手を交わす。

微笑みあう二人。

30　スナック〝友子〟・店内

春樹と利枝子が戻ってくる。

春樹「お邪魔しました。（とあやめに）あやめちゃん、利枝子と仲良くしてあげて」

あやめ「春樹先輩……？」

春樹「利枝子は、冷たいときもあるかもしれないけど、本当はものすごく優しい女の子なんだよ。良いお姉ちゃんを持ったね」

不思議そうに春樹を見るあやめ。

春樹「（利枝子に）じゃあね」

利枝子「うん、バイバイ」

と、利枝子に手を振ると、

春樹「（友子に）お邪魔しました」

と、去っていく。

あやめ、いぶかしそうに利枝子を見る。

利枝子、何事もなかったような顔で母屋に戻っていく。

31　牧家・玄関

和哉が聡実を伴って帰宅する。

和哉「ただいま」

聡実「お邪魔します」

と、居間のドアが開き、淑子がやってくる。

和哉「なんだ、いたのか」

淑子「今日は、お父さんもいるわよ。（と聡実を一瞬見ると、和哉に）お客さん？」

和哉「ああ。中学からの友達で、今もクラスが一緒の聡実」

聡実「（淑子に）こんにちは」

淑子「（少し冷めたように）いらっしゃい」

と、そそくさと居間へ行く。

和哉「行こッ。冷たいのはいつものことだから」

苦笑する聡実。

32　同・居間

洗濯物をたたんでいる淑子。

新聞を読んでいる貴幸。

淑子「女の子を連れてくるなんて、和哉も変わりましたね」
貴幸「和哉だって年頃なんだ。好きな女の子を家に呼ぶことだってあるだろ」
淑子「冗談じゃありませんよ。あんな女の子にそそのかされてたまるもんですか。（と何かを察するように）ちょっと、様子見に行ってきましょうか」
貴幸「よしなさい、みっともないマネは」
淑子「だって、もしもの事があったらどうするんですか。今どきの子は油断も隙もないんですよ。いくら自分の部屋だからと言ったって、どんなことしてるか分からないんですから」
呆れ顔の貴幸。

33　同・和哉の部屋

ベッドの上に座り、キスを交わす和哉と聡実――横たわり、お互いの顔を見つめる。

頭をなでる和哉――照れ笑いする聡実。
と、ドアを開けようとするが、鍵がかかっており、ガチャガチャという音だけがする。
慌てて起き上がる和哉と聡実。
聡実「（小声で）もしかして、お母さん」
和哉「（小声で）大丈夫だ。内側から鍵しめてるから、入れないよ」
聡実「（小声で）そっか」
再び、聡実にキスをする和哉――そのまま横たわる。
まだ、ガチャガチャとドアを開けようとする音がしている。

34　同・居間

淑子が戻ってくる。
淑子「鍵しめてありました」
貴幸「見に行ったのか？　あれほど、よせって言ったのに」
淑子「何もなかったら鍵なんてしめることな

いでしょ。これから、あの子を家に呼ぶのを禁止にしましょう。それに今は、そんな呑気なことをしている場合じゃないんですから」

黙ってしまう貴幸。

35　中央高校・全景

36　同・二年Ａ組教室

春樹が登校してくる。

春樹「おはようッ」

既に来ている亮、剛士、奈々が、春樹の席にやってくると、

亮たち「おはようッ」

と、利枝子が登校してきて、

利枝子「おはようッ」

春樹「（利枝子に振り返り）おはようッ」

驚いたように春樹と利枝子を見る亮。

亮「（春樹に）どうしたんだ、お前ら？」

春樹「（苦笑して）まあ、いろいろあったけ

ど、俺たち仲直りしました。ご心配おかけしました。だから、みんなも亜沙美の事許してあげてね。もう、過ぎたことは忘れようって決めたから」

奈々「やっぱり、何か変だと思ったんだよね」

春樹「何だ、気づいてたの？」

奈々「まあね（と笑う）」

と、亜沙美が登校してくる。

クラスメイトたち、一瞬亜沙美に冷たい視線を送る。

春樹「（クラスメイトたちに笑顔を振るまって）ほら、みんながそんな怖い顔するから、亜沙美だって辛いでしょ。人間、誰だって失敗はいくらでもするんだから、いちいちイライラしてたらキリがないよ。そんな暇があったら、今日からの学校祭準備に全力を注いでよ」

クラスメイトたち「……」

利枝子「そう、春樹の言うとおり。（と亜沙美に）亜沙美、昨日はやりすぎた。許して

もらおうなんて思ってないけど、謝らせて。
ごめん（と深々と頭を下げる）」
奈々「私も……。亜沙美、ごめんね（と頭を
下げる）」
亜沙美「……」
春樹「亜沙美」
亜沙美「みんな……私のせいで、ごめんなさ
いッ（と深々と頭を下げる）」
利枝子「（クラスメイトに）ほら、亜沙美も
ここまで言ってるの。もう、許してあげよ
うよ」
女子生徒Ｄ「私は……それで良いと思う」
女子生徒Ｅ「私も」
男子生徒Ｃ「俺も」
男子生徒Ｄ「俺もだ」
亮「よし、これで一件落着になったわけだし、
もう良いんじゃないのか」
剛士「頑張るのはこれからなんだから。（と
春樹に）な、春樹」
春樹「うん。みんな、学校祭、成功させるぞ」

一同「おーッ」

生徒たちの顔に、笑顔が戻っている―

―その中で、一番春樹の笑顔が輝いて見える。

37　大学病院・全景

38　同・廊下～病室

浩輔がやってくると、ドアを開け、病室に入る。

靖司と謙輔が既に来ており、ベッドで眠って入り愛子の側についている。

靖司「よく来られたな」

浩輔「仕事の休み時間の間だから、すぐまた戻らなきゃいけないけど」

靖司「母さん、今、薬の作用で眠ってる。今日は、飲酒要求を絶たせようっていうリハビリみたいなことをしたんだ」

浩輔「そっか……」

靖司「アルコール依存症なんて、ただの酒の

飲みすぎだって甘く見てたが、間違いだったみたいだな。病院に連れてって、ほんの数日の入院で済むと思ってたが、もう一ヶ月近くは経つもんな」

謙輔「先生の話では、一応三ヶ月までは入院させて、そのあとは自宅療養をするって。それも、入院カリキュラムの一つなんだって」

浩輔「結構、本格的だな」

靖司「当たり前だろ。アルコール依存症は立派な病気なんだから。（と愛子の寝顔を見ながら）母さんのためなら、どんな治療でもしなきゃ」

浩輔「……」

謙輔「親父、あとのこと頼むぞ。俺、そろそろまた営業回らないと。いつまでも、ここにいるわけにはいかないから」

靖司「ああ、ありがとな。顔だしてくれて」

謙輔「じゃあ」

と、出ていく。

靖司「（浩輔に）浩輔。母さんの病気が治ったら、最初に、何て声をかける？」
浩輔「え……？」
靖司「お互い頑張ったよなって、父さんは言うつもりだ」
浩輔「……？」
靖司「先生に言われたんだよ。アルコール依存症というのは、患者一人の病気ではなく、家族ぐるみの病気だって」
浩輔「……」
靖司「謙輔にも言ったが、俺たちの病気でもあるんだよな。だから、俺も母さんも、謙輔もお前も、みんなが治療をするつもりにならなきゃ、母さんの病気は治りやしない。お前も、一つの病気を治療しているつもりで、これからは病室に来てほしい。何事も、母さんのためだ」
黙ってしまう浩輔――愛子の寝顔を見つめる。

39　アパート・谷島家・居間

春樹と倫子が、夕飯の支度をしている。

倫子、手を止めると、

倫子「え、薫先生に？」

春樹「うん。前にひまわり園に行って、お願いしてきたの。一度よく考えていただきたいって。あそこなら、薫先生もいるし、倫子にとっても働きやすい環境じゃないかなと思って」

倫子「そっか」

春樹「仕事もすれば、また生きがいも見つかるだろうしさ」

倫子「じゃあ、私もそろそろこの家を出てくるタイミングが来たってことか」

春樹「え？」

倫子「仕事が決まったら、ここで居候する必要もないもんね。それにさ、考えたけど、私だっていつまでも、ここにいるわけにはいかないし、そろそろ自立しなきゃね。春樹の言葉に甘えてずっと居候してたけど、

これ以上お荷物になるわけには……」

春樹も、手を止めると、

春樹「俺がいつ、お荷物だって言った？　何も、仕事見つかったら家出ていかなくたって、ここから通えば良いんだから」

倫子「けどさ、私たちが一緒にいると、変な風に思う人だっているわけだし。それで春樹が、どんな目に遭ったか……。私にだって、今回のことに原因がないとは言えない。私がここに来て、一緒に春樹と暮らすようなことさえしなければ、今回の事件だって起きなかっただろうし」

春樹「そんなことない……。今回の一件は、誰が悪いわけでもないの。それは、学校でも話した。今回のことで、倫子には辛い思いも嫌な思いさせたのかもしれないけど、それと家を出ていくとでは全く違うでしょ」

倫子「同じだよ。私、今回のことで、自分の立場を思い知らされた」

春樹「……」

倫子「養護施設で育った時と同じような感覚で一緒に春樹と暮らしてたことが、そもそもおかしいんだよ。ここは施設でも学生寮でもないんだから。十七歳になる男の子と女の子が、同じ部屋で一緒に暮らしてるの。しかも、血縁関係なんて一切ない、赤の他人の私たちが」

春樹「俺は、倫子を赤の他人だなんて思ったことは一度もないよ」

倫子「春樹の気持ちは分かってる。でも、やっぱり私は、ここにいちゃいけないんだよ」

春樹「……」

倫子「そこまで引き留めてくれるのは嬉しいよ。けど、このままずるずると続くと、私たちのためにならない。分かって、春樹」

黙ってしまう春樹――無言のまま、再び支度をしている倫子。

40　宮田家・居間

浩輔が来ており、真由子と一緒に夕飯を食べている。

真由子「一人でご飯食べるのも寂しいから、結局また浩輔誘っちゃって、ごめんね」

浩輔「いや、俺は別に良いよ。父親も兄貴も、母親の病室に顔を出してるとは言っても、暇ではないみたいだからさ」

真由子「そっか」

浩輔「今日、母親の見舞い行ってきた」

真由子「それって、私のお父さんが紹介した総合病院のこと？」

浩輔「そう」

真由子「どう、お母さんの様子は？」

浩輔「俺が行ったときは、眠ってた」

真由子「じゃあ、話せなかったんだ」

浩輔「まあな。でも、治療しているってことさえ分かれば、それで良いから」

真由子「そっか、良かったね」

浩輔「勉強になったよ。アル中は、家族ぐるみの病気なんだってこと」

真由子「……？」

浩輔「家族の問題は、家族で解決しなきゃいけないんだよな。そう思うと、母親がアル中になった原因になってる自分が、すごい嫌な奴に思えてきたんだよ……」

真由子「アルコール依存症は、治る病気なんでしょ？　それだったら、私の方が悪い親不孝な娘なのかもしれない。家庭のある男と付き合って、子どもができて、フラれて……。それでも真実を産んで、母親やってる。でも、そのことでお父さんにはとっても迷惑かけてると思ってるの。子どもを育てることは、犬や猫を育てるのとでは訳が違う。一生の問題だもん」

浩輔「……」

真由子「お母さんと離婚してから、男手一つで私を育ててくれたのに、迷惑ばっかりかけてる。医者という仕事だけでも大変なのに、私も育てなきゃいけない。それなのに、今度は、突然孫ができたんだもんね。お父

さんに迷惑をかけるのは、お母さんだけで十分なのに、結局私は、その二の舞を踏んじゃった……。何か大きな経験をしないと、親の気持ちが分からないなんて、情けないよね……」

浩輔「これ以上、親不孝者にならないようにしたいよね」

真由子「そうだね。今に、自分たちに降りかかるようなことになりたくないし。親は、大切にしないとね。父親も母親も、この世にたった一人しかいないんだもんね」

冷静な顔の浩輔である。

41　牧家・居間

和哉が入ってくる――夕飯の支度をしている淑子。

和哉「あれ、父さんは？」

淑子「出かけたわよ」

和哉「夜に出かけるなんて、珍しいな」

淑子「好きで出かけたんじゃないわよ……」

和哉「母さん……？」
淑子「……和哉、落ち着いて聞いてね」
和哉「……？」
淑子「うちの会社、アメリカの大きな企業に吸収合併されることが決まったの」
和哉「え……？」
淑子「だからお父さんは、もうすぐで社長ではなくなるの。一応、それなりのポストは用意されてるとは思うけど、もうお父さんの会社でなくなるからね……」
和哉「その合併って、いつになるんだ？」
淑子「それは分からない。ただ、吸収合併されて、業務内容が大きく変わるのは確かなことよ」
和哉「……」
淑子「そうなると、ここにいられるのも時間の問題ね」
和哉「じゃ、俺たちはどうなるんだ？」
淑子「それは、まだ分からないわ」
と、出ていこうとする。

和哉、淑子を止めると、

和哉「ちょっと待ってよ。俺たちの問題だぞ。分からないってどういうことだよ？」

淑子「（ヒステリーに）仕方ないでしょ。いずれ公の発表があるとは思うけど、吸収合併されたら、方針だって変わるの。お父さんの思い通りには行かなくなるの。だから私たちがこれからどうなるのか、それはお父さんも知らないのことなのよッ」

和哉「……」

淑子「とにかく、このことは誰にもまだ話しちゃダメよ。良いわね」

と、出ていく。

激しく落胆している和哉である。

つづく